

上三川 近代化の歩み

〜明治維新から戦前まで〜

農業が支えた近代化〜耕地整理事業〜

明治時代以降の近代化を語る場合、どうしても工業を中心とした技術の進歩が注目されますが、その根底を支えた農業の発展にも注目する必要があります。中でも米の増産は重要な課題でした。

明治以降の資本主義経済の発達によって、農業を行なわない人々が増えると、人口増加もあいまって米不足となりました。日本全体を見ると、明治23年頃は米の輸出国でしたが、10年後には輸入国になってしまいました。そこで生産力を増やすため、開墾が積極的に行なわれ、明治28年から昭和10年の40年間で水田が6%、畑が4%増加し、その一方で山林が6%減少しました。上三川地区・明治地区に限ってみると100haも増加しているなど、大規模な開墾が行なわれたことがわかります。その一方で、既にある田畑の生産性の向上を目指して、大規模な耕地整理事業が展開されました。



明治時代に行われた土木工事では、写真のような巻尺などを使い、測量が行われました (写真：巻尺と矢立て)

この耕地整理事業は、最も古いもので明治40年から実施され、昭和9年までに24か所、約710haもの面積が実施されました。これらの事業は主に①水田の高さを一定にし、灌漑水路を適切に配置して、水を効率的に配分する。②排水路を設置し、湿田を乾田化し生産量を増やす。③耕作道の改良を行い運搬等の利便を図る、といった目的で行なわれました。中でも灌漑水路は、堰の高さや配置が不適切であったことが、水争いの原因となっていたため、早急な改修が必要とされました。しかし

工事費は多額に上り、例えば約130haの事業を実施した上三川町大字上三川外一大字の耕地整理事業では、約14万3千円（現在の値段で約2億円）かかり、銀行の融資、耕地整理組合の役員の持ち出しや組合費によりまかなくなりました。

このように積極的に行なわれた耕地整理事業によって、生産性が著しく向上し、米の生産量を増加させる大きな要因となりました。一方で、このような大きな事業の影になります。生産性向上への農家の方々の地道な努力も、日本の近代化を支えた、大きな原動力となったことを忘れてはいけません。

名報短歌

再びの悲喜もごもの期待のせ

首相の特機朝もやに消ゆ(再訪朝)

小島キミ

遅れ咲きの芍薬の花供うれは

好きとう亡母の笑顔に向き会う

高田幸子

玄関に活けし鉄線の紫の

花びら散るを見つつ脱ぐ喪服

武藤ひさ

涼もとむ水無月の風良し悪しと

一人つぶやく湯上りの縁

高橋ツギ子

瀬戸内の大吊橋のワイヤーは

海の碧さを間隔に切る

稲葉敬子

細ぼそと生き長らえし一本の

牡丹開きし今朝を彩る

井沢和江

埋もれ木に花咲く如し夢にきて

健やかなれる母の笑まふも

沢谷郁子

生れし日に桜は盛りか散り果てしか

焼失し知る人も逝き

斉藤アツ子

深しんとこの身に住めるかの声の

逝き三年のあじさいの咲く

菊地美代